



幼児の陶冶性を培養すべし

和田 實

「水は方圓の器に従ふ」と云ふ諺に間違はありませんが、併し如何に水だからとて若し器の方又は圓に従つて、其形を變へると云ふ性質を備へて居なければ、圓いものに入つたから必ず圓くなると云ふわけには行きませぬ、之と等しく兒童も善

悪の友や、師父の感化如何に依て善人ともなり、悪人ともなりますが、然りとて子供に此の如く外界の影響を受け入るゝ性質がなくなれば、決して斯様な發展を遂ぐるとはありません、子供は斯様に外界の影響を受入れるゝ性質を有して居ります、此性質が即ち陶冶性と云はれるものであります、此陶冶性は子供の幼き時に最も盛んで、壯年に及ぶに従つて漸次減少して行きますが、教育を行ふ間は成るべく此性能を盛に活動させて置かなければなりません、然るに行き届かぬ家庭の子供を見ると、何れも種々の方面から此性能が破壊されて居りますから、保姆や教師の云ふ事も聞かず、友達の制裁をも恐れず、動もすれば教育に反對の決果を生ぜしめんとするのであります、幼稚園や小學校では殊に此點に注意して其を損せぬ様として益

之を培養しなければなりません、殊に兒童の徳性の基礎となるべき次の三事項は、此時期に教育しなければ後來逆も回復の望がありません、

一 倚頼信任の情を永續せしむるを

兒童は其本性として常に大人に倚頼し其言行に信任するものです、殊に保姆教師に對しては此情特に厚きを例とします、従つて、兒童は保姆や教師の教誡に従順し、其言行に模倣して進歩するを得るものです、兒童に此情の存する中は、能く他の長所を取り入れ、訓誡に應じて益々進歩修養の効があります、けれども若し此情が一旦兒童の胸中を去つたならば、我意が徒らに強固になつて師友の感化も其甲斐なく、修養時代に於ける唯一の良性たる「從順」の徳は、遂に兒童の身邊を去りて再び來るとがなくなり、人或は兒童の有する

此倚頼心を、早く失はせるのを以て、教育の任務であるかの如くに思惟するものがあります、勿論依頼心と云ふものは、右に述べたる倚頼信任の性能から分派し發生した悪性には、相違ないですが然りとて此倚頼信任の情と云ふものがなかつたら子供を逆も教育するとは出来ません、然るに考のない家庭では、態々子供の前で教師や保姆の悪口を云つたり親自身が信任されない様な言行を示すので、子供は早くから此良性を失ふ様になります、丁度故意に早く教育し悪い様に自らして居る様なものです

二 眞面目なる意氣を害す可からず

兒童は極めて眞面目なものです、兒童の滑稽も諧謔も皆故意に出づるにはあらず、全然眞面目になさるゝものです、そして此眞面目が即ち後來精意

誠神を以て事に當ると云ふ意氣の生ずる根本なので誠に大切なる筋芽でありませぬ、子供を尊敬し大切に扱ふ人は、此邊の具合を能く承知して居ますか、世人の多くは誠に心なき遣り方で、或は子供を愚弄したり、馬鹿にしたり、からかつたり、冷かしたりするので、可惜子供を損するところがありません、一人人間は眞面目に考へればこそ、圓滿なる生活とか、家庭の和樂とかを望むのですが、若し不眞面目で差支ないとしたら、何も齷齪とせち辛い世の中に働くとも要らない事だらうと思ふです、世の浮浪人や無頼漢の多くは、皆無眞面目な考がないから哀れな境遇に陥つて居るので、又此度の戦に日本の勝ち露國の負けたのも、双方の國民に此氣風の優り劣りがあつたからと思ひます、實に我國民殊に陸海の軍人が彼日清戦争以來、其眞

面目に軍事の發達に努めた事と云つたら一通りではなかつたので、今度の戦勝は決して偶然ではありませぬ、西洋人も日本人の眞面目なものには實際感心して居るそうです、誠に尤の事で、個人としても、眞面目の人でなければ、逆も世渡りに成功する事は、出来ませぬ、況して是から修養の道に出立しやうとする兒童に、此氣風を欠かせるやうでは、逆もく將來の見込は立ちませぬ、三修養慾を培養す可し、學ぶ事と遊ぶ事とを結合して、不知不識の中に教育をして行かうと云ふ事は、幼稚園教育の主眼でもあり、誠に結構ではあります、是は程度のも事で或程度以上になると、逆も學ぶとと遊ぶとは、同様には見られませんので、矢張學ぶ事は遊ぶ事よりは苦痛の多いものであります、其苦痛

に打克つても、益修養して行かうと云ふには、
 かなりの努力を要するものですから、此努力を多
 々益辨じ得る様に、兒童の修養慾を涵養して置
 くとは大切な準備であります、如何に兒童心身の
 活力が盛であつても、其修養慾が適當に培養し
 てなければ、勉強上に努力を集中する勇氣は起り
 ません、故に「東郷大將になりたい、大山大將と
 ならん」など云ふ子供の欲望を利用して、其欲望
 を達せんには修養の必要になると、其修養には多く
 の忍耐努力を要するを、漸次悟了する様に仕向
 けなければなりません。



實驗上の育児 (つゞき)

醫學博士 瀨川昌耆君述

生兒の抱き方

▲脊中を打托こと 生兒を抱いて搖る事が既に

悪ければ夫れと稍相似たる仕方では生兒を抱いて脊
 中を打托事の習慣がある爾うすると生兒は泣いて
 居ても次第に泣止んで仕舞ひます、此の習慣は發
 育上如何なる影響を及ぼすかと云へば之れは抱い
 て搖る程の弊害は無い、餘り強く、永く打托ては
 甚だ宜しくないが靜に、軽く言はゞ守唄の相の拍
 子に叩く位なら先づ差支へないのです

▲抱き布團にて抱くべし 一生兒の腰から下

は襁褓を幾重にも厚く捲いてあるし、身体の上
 部はシヨール杯で纏むもの、スルと生兒は襁褓や
 シヨール杯に支へられ何うやら斯うやら眞直の形